初期の人工哺乳から自然哺乳への切り替えに成功したオオツノヒツジの一例

〇半澤紗由里、木戸伸英、近江谷知子、田中宗平
（横浜市立金沢動物園）

横浜市立金沢動物園で飼育しているオオツノヒツジ（*Ovis canadensis canadensis*）において、2017 年 5 月 3 日に出産があったが、子の異常体位により帝王切開となった。術中、子を母の乳首に近付けたり、術後も母子を同居したりと、人工哺乳回避の取り組みを行ったが、母が子を許容することはなく人工哺乳となった。母は、子の吸乳を受け入れることはなかったものの、子への攻撃は見られなかったため、母子同居を継続した。一日一回、母を術後治療のため保定したので、その際に搾乳し、母乳を人工乳と併せて給与した。5 日齢から、母を保定した状態で子を乳首に近付ける授乳馴致を開始した。翌 6 日齢から、授乳馴致中に子が母の乳首に吸い付くようになったので、母の搾乳は中止した。当初、母は子の吸乳を嫌がり、後肢で蹴る動きが見られたが、馴致 3 日目（7 日齢）より嫌がる様子はなくなり、保定人員を 2 名から 1 名に減らしている。馴致 4 日目（8 日齢）には、保定時に軽く手を添える程度で動くことがなくなった。一方、子は馴致初日（5 日齢）には乳首の場所がわからず、誘導してもほとんど乳首をくわえることはなかったが、馴致 3 日目（7 日齢）には介助無しで乳首に近付いた。乳首をくわえるのには介助が必要で、一旦外れると自らくわえ直せないが、馴致 4 日目（8 日齢）には、自ら吸乳できるようになった。馴致 9 日目（13 日齢）の馴致中にほとんど吸入している様子がなく、自然哺乳を目視で確認したため、馴致および人工哺乳を中止した。しかし、体重増加が芳しくなかったため、15 日齢から補助的に少量の人工乳給与を再開した。体重が順調に伸び始めたことを確認し、25 日齢までで人工哺乳を終了し、26 日齢から完全に自然哺育に切り替えた。